

幽玄

題字
高秀秀信横浜市長

横浜能楽連盟
会報 No.21
平成13年5月26日

連盟の課題について

会長 新堀 豊彦



二十一世紀に入りました。六百年余りの歴史と伝統の上になたてなお輝きを失わず現代人の鑑賞に耐える舞台を展開している能は、新しい世紀においても引き続き魅力を失わず、日本は勿論、世界中の芸術文化における大きな存在として評価されてゆくものと確信をしています。

私たち、能・謡曲の愛好者の横浜という地域における連合体である能楽連盟も、そのサポート役をより一層地元において強めてゆく必要があると存じます。横浜能楽堂の活動が全国の注目を集めており、東京へ行かなくても質の高い能・狂言の鑑賞が可能な状況になっておりますが、

活動をされるようになれば昭和二十八年に始まった「横浜能」の使命は、ほぼ終わったということも出来るのであります。したがって当連盟の本年以降の大きな課題として、「横浜能」の位置づけを図る必要を感じるのであります。明年の五十回を契機として抜本的な見直しをいたしたいと存じます。

「横浜能」は年一回、五流の家元級の出演を求めて開催して参りましたので、それと同じ格づけのもとに能楽堂の計画に組みこまれマッチしたものととして、市民、愛好者の期待に応えるべきではないかと考えます。

大きな問題でありますので、広く皆さんの御意見も是非お伺いしながら方向づけをいたして参りたいと存じます。

横浜能楽堂連盟 定期総会開催

四月二十五日(水)横浜能楽堂第二舞台で、平成十三年度の総会が開催された。開会の辞、会長挨拶、来賓祝辞(能楽堂館長代理石井利夫氏)のあと、連盟規約に基づき会長が議長となつて議事録署名二人名の指名があり、続いて、各議案が審議された。

審議は、第一号議案の十二年度活動報告、決算報告、監査報告、第二号議案の十三年度活動

計画(案)、予算(案)ともに原案どおりの内容で承認された。活動計画は主催事業のうち、第四十九回「横浜能」は、一日目九月一日が宝生流の能「通小町」に観世流と(観)梅若会の仕舞、二日目九月二日が金春流の能「田村」に喜多流と金剛流の仕舞。

第十七回「横浜五流能楽大会」は、五月二十六日会員による素人能が予定されている。第五回「五流交流のつどい」は平成十四年二月九日に開催する。

後援事業、組織広報活動の強化は例年どおり続けることとなった。役員については、今回は改選がなくまた昨年承認された役員に変更はなかった。

なお、四月一日現在の会員数は五四四名(前年比十二)出席会員四十名、委任状提出二八九名であった。

総務担当 鈴木 力雄
常務理事

第四回「五流交流のつどい」の報告

横浜能楽堂の開館を機に、本舞台出演経験のない初心者の方に「場」を提供するため平成九年度から始めた「五流交流のつどい」は四回を数え、平成十三

年二月三日無事終了しました。幹事流派として、関係各位のご協力に厚くお礼申し上げます。実施経過のうち特記事項をご報告いたします。

(1)実施計画は開催日より六ヶ月前の理事会で承認され、時間的に十分な余裕をもって計画を進められ十二月中旬に番組をお届けすることができました。

(2)観世流から持ち時間以上の出演希望がありました。梅若会、金春流が少なくなったこと、開演・終演をそれぞれ十五分増やしたことで等により余裕のある番組編成ができました。

(3)毎回反省の話題となっております。まず出演申込時間に対する正味出演時間の超過であります。結果は次表のとおり出演時間が超過した流派があったもの

各流派別出演記録

観世流(観)	演目(番)			出演時間(分)		
	連業	仕	他	予	実	
梅若会	7	8	2	158	127.4	
宝生流	2	4		6	71	
喜多流	3	4		7	80	
金剛流	2	4		6	51	
金春流	2	3	1	6	40	
合計	18	27	3	48	440	
挨拶・段取り時間					23.2	
始曲				9時43分	終曲	5時01分
					438.0	

の全体としておよそ二十五分ほど早く進行し、挨拶や段取り時間等を含めてほぼ予定時間どおり終了できました。

(4)初心者が対象ということで、時間どおり演じることの難しさがあるかとは思いますが、

それだけに事前の練習を繰り返されて、これに出入りに要する時間を加えて申告時間として下さいますようお願いいたします。

(5)能楽連盟では「超過出演料算出基準」により、申込時間に対する超過時間の比率に応じた超過出演料を、負担していただくことになりましたことを申し添えます。

幹事流派 観世流 鈴木 力雄

観月能を見て

常務理事 喜多流 杉山 昭二

昨年の秋十月十一日に友枝昭世巖島観月能が行われた。毎年中秋の名月の頃にしかも大汐の日を選んで巖島神社の能舞台で観月能が行われる。私は今回はじめて参加させてもらったが、友枝昭世師は四回目の演能であるという。今年は翌日の献茶式に備えその為の仮設の棧敷を張

ったままの上演で、いつもの回廊からだけの観能でなく水の面が少ないのでこれまでの水鏡による幽玄さが半減されるのではないかと主催者の危惧が挨拶に書かれてあった。

演目は世阿弥の傑作「敦盛」である。平家公達「亡びゆく者の美」ということで平家縁りの巖島神社に相応しい演目である。かつて台風の被害にあった巖島神社も今は修復されユネスコの世界文化遺産として登録されている。この日は日中足早に歩くと汗ばむような陽気で晴れ上った中秋の宵に十三夜の月の出を待って始まった。十六才の若さで一の谷の合戦に熊谷次郎直実の手にかけられた平敦盛とその無情を懺悔し出家して蓮生法師となった直実のこの物語には深い哀愁が漂う。能は進行してただ一人残った草刈男を不審に思い尋ねると自分は敦盛の霊であることを仄めかして消え失せる。

蓮生法師は夜もすがら念仏を唱えてその霊を吊っている。この頃になると能舞台にピチピチと汐の満ち柱を打つ音がし回廊の篝火は瞬き月も出てその影は水の面に輝き敦盛の悲運を悲しむが如く愁いを漂わせるのである。武者姿で現われて敦盛の霊は平家の栄華と没落と自分の最後を

物語り敵と巡り合って仇を討とうとするが自分を吊ってくれてる蓮生法師は最早敵ではなく回向を頼んで消えてゆく。月は中天に昇って水の面を照らし水は鏡となって輝く。

いつもこの時節には海上であるので温度が下がり寒いので主催者から入口で懐炉が配られたけれども当日は昼間から暖かく使うこともなかった。汐の満ちる音と十三夜の月の水面に映る中で敦盛の哀愁と直実の悔悟を味わったすばらしい一夜だった。

これまでの観月能では回廊からの鑑賞だけだったが今回は棧敷席からも鑑賞できることで柱が無く見易い反面回廊からの景観が失われるのではないかと主催者側の心配も杞憂に過ぎず汐の満ちる音、月の光、篝火のまたたきと能とが一体となって幽玄の美が練り広げられ感慨深い会であった。本当に宮島までやって来てよかったなあと痛感した次第で満ち足りた気持ちで連絡船に乗ったのだった。

処で今年の横浜能は喜多流は仕舞を担当することになっております。第二日目の九月二日(日)に内田安信師の「天鼓」、出雲康雅師の「融」を舞われます。能は金春流の「田村」です。どうぞご期待下さい。

仕舞六十の手習い

宝生流 門脇 達祐

先日、明治座で「近松心中物語」という芝居を見ました。能以外には演劇を見ることの少ない私ですが、この芝居は二十年前と五年前にも見ており今回で三度目でした。そして前回までは気にもかからなかった或る所作が印象に残りました。それは、花魁が客席の通路をしずしずと通って舞台上上がる道中の場面があります。花魁に長い傘をさしてついて行く傘持ちの姿でした。プログラムには小さい字の名前しか書かれていない役者ですが、背中が首筋まで真っすぐ伸び顎を引いて上体はもとよりあの長い大きな傘が全く揺れないのです。足が見えないのでゆっくり滑っているように見えたことでした。仕舞を始めた結果の着眼点の変化だと思えます。余談ですが、せつせと遊郭に通う養子に姑が小言をいう場面で「謡の稽古だ俳諧だといっては出かけてゆく」というセリフがあり、一人で苦笑しました。

私はちょうど古希を迎えたところですが、八年前に仕舞の稽古を始めまだ初心者の段階です。思い立ったが吉日とはいってもなせもっと早く始めなかったのか。今更どうしようもありません。



今はいろいろなカルチャー教室がありますが、中でも絵画教室が繁盛しているそうです。素人の楽しみですから展覧会でも上手下手を問うべきではないかもしれませんが、手を抜かないで充分描き込んだ絵にはやはり

ん。しかし、まだこれからです。四年前のことですが、私の属する同門会でY女子が能「半部」を舞われました。面をつけているのでお年のころは判りませんでした。ビシッとときまった風情のある能でした。あとで聞いてビックリ言語道断、七十才で仕舞の稽古を始め今八十才で初めて能を舞われたということでした。昔は体育の先生だったそうです。私は七十よりもっと若い時期から仕舞を始めたのだと自らを慰めているところです。

人を引きつける力があります。仕舞でも、一手一足に気を抜かないで力を充実させてやるのが大切だと近ごろどうやら分かりかけてきました。先生から「左手がお留守になっている」とか「首だけ動いて体がついていない」とか「指導」をとられますが、そのうち「技あり」を受けていけないように気を抜かないでやろうと思っております。謡の幅を広げ深さを増すのに有効だろうと思つて始めた仕舞ですが、だんだん深みに引きずり込まれていくような予感がしております。

「はちのき」のこと

観世流 市村 士久

昨秋も観能が初めてという内外の方々を大勢お招きしての演能「鉢木」は終わった。

今日顧みるに、この鉢木は聞きしに勝る大曲であった。稽古に比例して思い煩いも深刻化、修行僧の苦行にも似た能独特の姿勢（立て膝の踵を一方の座居させた足の裏湧泉あたりに乗せ）で長時間の台詞は脚の痺れと共に逃げ場なき苦痛に悩まされる。謡や所作に、序破急を考慮に入れる余裕すらなくなり平淡に陥り易くなる。その上、脚に絡みがちで不自由な長袴に苛

立ちすら覚えてくる。以上諸々の問題をクリアしつつ、華やかな能装束からは想像出来ない程身上が零落している人間を表現する事や、声色と目線で降る大雪を、又松以外の梅桜を恰もそこにある様に見える演技等々、更に武士の品格を落とさず、直面の面であるからオーバーなアクションは慎んで、という師のご指導に自分なりの試行錯誤が開演寸前迄続いたものであった。宣伝期間にも苦勞があった。年配の大多数の方には予備知識としてあったが初めての若年層の方からは「はちのき」って何？大雪時の話って？舞台一面紙吹雪降るの？等々又外国の方には尚更解説するのに難儀した。従つて私は敢えてチラシに「鉢の木」とし、物語の原点となる文献を添付したのもや詳しい英文を配布した。

その効有りて、終演の翌日以来未だにいろいろな方からお手紙を頂戴する。特にその中に一人の外国の方からキリストの精神にも通ずる心温まる感動を覚えた。こんな能がわかり易く素晴らしいものと思つていなかった。サンクスソーマッチと。日本人でさえ忘れかけているこの心の問題は、現代に於いて軽んじられつつあるという認識を新たにせざるを得ません。



この演能の成否を決すると言ふ第一声「ああ降つたる雪かな」については、能をよく知る方々から私が年令的に丁度常世役にフィットしていた。声調も良好、目線の落ち具合にも降る雪を感じさせてくれた。等賞賛の言葉を頂戴し、赤面の至り。私に年頃だからこれをやりなさいとおっしゃって下さった師に改めて感謝の意を表したく存じます。

私のお稽古あれこれ
横濱梅会 三上富美子

私は時折娘の所に行きます。孫が二人いますが、気を遣ってくれる故かおしゃべりがとても楽しいのです。ところが夜のテレビタイムになりますと見る番組は全く別で、孫達は圧倒的に歌番組が多く中には実力があつて思わず引き込まれる様なものもあるのですが、多くは只騒々しくギラギラしていて何で良いのか判りませんし、ただ単に可愛らしいカッコいい珍しいというだけで、どうしてCDが何十万枚も売れるほどうけるのか不思議なのですが、どれもリズムが強すぎる程ハッキリしていてノリが良いのです。年と共に躍動的なリズム感は衰えるでしょうし持つて生まれた寡母もあると思います、本来人間はリズム感を持っていて、それを心地良く思い、それに依つて精神的に安心感、満足感、昂揚感を持ち、又それにのりたい本能があるのではないのでしょうか。

なる事ばかりでした。速度とか間とかはある程度見えますが、謡に関してのリズムとは、西洋音楽の様にメトロノームで示す様な時間的に正確なものではなく、したがって見え難く判り難く、又表わし難いものだと思います。

よくお謡に関して、一曲の中に、文節に、一語に、一字の中にも序破急があると言われます。よく聞く言葉なのですが、具体的にどう感じどの様に表すのか判りませんが、「安宅」の勸進帳をお稽古した時の先生のご注意で、序破急とはきっちり三段階に分かれているものではなく、何んといひましようか山をなして一体化しているものでは？等と独り合点をしていました。先日ある先生が「節にもリズムにもうねりがある」とおっしゃいました、これも一字に一語に、文節に一体化した序破急がある事をおっしゃったのでは？と思うのですが。そしてこの様な事は教えて教えられるものではなく、一にも二にもお稽古を積み重ねてこそ、知らず知らずの内に身について来て、リズムが生まれノリの良いお謡になるのではないのでしょうか。よく先生は考えて謡う様におっしゃいますが、そしてひたむきにお稽古をした時期もありましたが今では自らの年を考え、



力の無くなった事を痛感し感性の無さを思い知らされ、そもそもお謡を始めたのは若い時から年を取ったら日向ぼっこをしながら、好きな時に好きな謡をうたって楽しめたら、と思った事だったと思ひ出し何よりも楽しむ為にだけ謡っている最近の私です。

『横浜能』へのお誘い

第四十九回横浜能を次のとおり開催いたします。

九月一日(土)午後一時。能「通小町」(宝生流) 高橋 章、狂言「鱸包丁」(大藏流) 山本東次郎、仕舞四番。正面六千円、脇正面五千円、中正面・二階四千円。九月二日(日)午後一時三十分。能「田村」(金春流) 守屋泰利、狂言「狐塚小唄入」(大藏流) 山本東次郎、仕舞四番。正面六千円、脇正面五千円、中正面・二階四千円。チケット発売は、両日分とも五月二十六日(土)窓口で午後二時から、電話受付は午後二時三十分から。

能楽堂だより

六月～八月の公演

横浜能楽堂では以下の通り公

演・講座を開催致します。「開館五周年記念企画公演 梅若六郎・野村萬」この面で舞いたい」

六月二十四日(日)午後二時。能「當日発表」(観世流) 梅若六郎、狂言「當日発表」(和泉流) 野村萬。正面八千円、脇正面七千円、中正面・二階六千円。チケット発売中。

「第三十一回普及公演」バリアフリー能」

七月五日(日)午後二時。能「是界」(喜多流) 佐々木宗生、狂言「仏師」(大藏流) 大藏吉次郎。正面三千七百円、脇正面三千二百円、中正面・二階二千七百円。介護者一名は無料。チケットは六月十六日(土)窓口で午後二時から、電話・FAXは午後二時三十分から。

「第三十二回普及公演」親子能楽鑑賞会」

八月十八日(土)午後二時。能「小鍛冶」(観世流) 寺井栄、狂言「佐渡狐」(大藏流) 大島寛治。正面三千七百円、脇正面三千二百円、中正面・二階二千七百円。高校生以下は各千円引。チケットは七月八日(日)窓口で二時から、電話は二時三十分から。

お問い合わせ・お申し込みは二六三―三〇五五まで。

横浜能楽堂利用申込方法の一部変更について

△変更される点▽

(一) 利用申込開始日が一部変更されます。

本舞台(能・狂言以外の古典芸能の公演等)のための利用の場合)及び第二舞台の利用申込開始日が、従来は「利用しようとする日の属する月の六カ月前の月の第二日曜日」でありましたが、平成十三年四月一日から「利用しようとする日の属する月の十二カ月前の月の第二日曜日」に変更されます。

平成十三年四月一日以降は、本舞台(能・狂言以外の古典芸能の公演等)のための利用の場合)及び第二舞台については、十二カ月前の利用まで申込ができるようになります。(三月中の利用申込は従来どおり六カ月前の利用までです。)

なお、本舞台(能・狂言の公演・発表、その準備や練習のための利用の場合、二十四カ月前から申込受付)、研修室(六カ月前から申込受付)、楽屋(前月から申込受付)は従来どおりです。

(二) 予約された場合の利用申込

期限が定められます。

平成十三年四月一日以降、横浜能楽堂施設の利用をご予約された場合、ご予約された日から一カ月以内にご来館いただき、「利用許可申請書」に施設利用料を添えて、正式の利用申込をしていただくことになりました。

一カ月を経過しても「利用許可申請書」による正式の利用申込・お支払いがない場合は、自動的にキャンセルの取り扱いとなりますので、ご注意ください。

(三) その他

貸出しする「付帯設備」に、燭台(一本・一時間百円)、菊造花(一式・一時間二百円)、ラジオカセット(一台・一時間百円)が追加されましたので、四月一日からご利用いただけます。

編集後記

▽平成十三年に改まり二十一世紀を迎えました。薫風さわやかに青葉若葉萌えつつ佳季節となりました。

▽幽玄は二十一号を数えたことを機に、A4版とし文字も大きく読み易くした。読者の皆様のご協力をいただきながら

これからも大事に育ててまいります。

▽四月二十五日行われた総会において今年度の活動方針が承認されました。今年の横浜能は初秋九月一日・二日の両日行われます。皆様方のお越しをお待ちいたしております。

▽今号の原稿は各流のご熱意により予定を超えて集まり、一部の執筆者分については次号でご紹介させていただきます。前号二〇号に掲載した観世流高岡幸彦氏の『余技の必要』の記事中「鎌田」とあるは「蒲田」の誤り。又、宝生流吉田澄夫氏の『謡、仕舞そして囃子』の記事中「太鼓」とあるは「大鼓」の誤り。編集後記の訂正記事「吉川正雄氏」とあるは「吉岡正雄氏」の誤りでした。お詫び申し上げます。

横浜能楽連盟 連絡先

○文書郵送又はFAXの場合 〒233-0013 横浜港南区丸山台二丁目 二九一七 新堀方

FAX ○四五―八四四―二九〇三

○電話の場合

横浜能楽堂 原田由布子

TEL ○四五―二六三―三〇五〇